

ハイデルベルク信仰問答講解説教 29 「聖餐の秘義」(2012年3月18日 礼拝説教)

【聖書箇所】

それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越である。その夜、わたしはエジプトの国を巡り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国のすべての初子を撃つ。また、エジプトのすべての神々に裁きを行う。わたしは主である。あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなたたちに及ばない。この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない。(出エジプト12:11-14)

わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。(Iコリント10:16-17)

【説教】

以前、ギリシャに旅行に行った友人から小さなアイコンをおみやげでいただいたことがあります。アイコンというのは、キリストの肖像等の聖画の描かれた四角い板で、東方教会では非常に重んじられています。今、書斎の机の前に飾っていますが、実は東方の人たちはこれを「天国の窓」と呼ぶのだそうです。東方教会にはこのアイコンから天国を見るという信仰があります。

わたしたちプロテスタント教会にはそういった信仰はありませんが、しかしそれと同じような感覚を持つ場所があります。それはこの礼拝です。この礼拝の空間こそ、わたしたちにとっては天国の窓、神の国をこの地上にあつて垣間見る、唯一体験する場所であると申し上げてよいでしょう。そういう特別な空間がここにあります。

十戒の第四戒に「安息日を心に留め、これを聖別せよ」とあります。わたしたちにとっての安息日、主の日の礼拝は単に日常の一場面ではありません。聖別する、それは特別に取り分けるという意味です。言うなれば、ここには日常ではない非日常があります。日常とは分断された空間がある。そこでわたしたちは神さまの御前に立つのです。出エジプト記にモーセがシナイ山で神さまと出会う場面があります。燃えている柴にモーセが近づくと、神さまの声が聞こえる。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」(出エジプト3:5) そういう聖別された空間、天国をここでわたしたちは体験している。礼拝とはそういう特別な場所です。

ちなみに、先の長老会で承認されたのですが、4月から礼拝式の始まりの部分が少し変更になります。前奏が終わると同時に、会衆席の方々には起立していただき、前を向いて司式者が朗読する招きの御言葉を聞きます。詩編第124編8節「わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある」そしてこの招きの御言葉に会衆は全員で「アーメン」と応えます。どのような姿勢で礼拝に臨むか。これまで招きの御言葉として詩編の第100編を朗読していましたが、その時に会衆は座ったまま、しかも奏楽を聞く姿勢のまま、下を向いて目を閉じて招きの言葉を聞いていたと思います。わたしたちはイエス・キリストによって罪赦され、神さまの御前に近づくのです。どうして座ったまま下を向いてよいでしょう。考えてみるとおかしいのです。でもそれが習慣化されてしまい、無反省に、内容あまり考えずにそれを行っていた。本当は喜んで頭を上げてこの招きを受けるべきなのです。わたしたちの属する全国連合長老会でも主の日の礼拝式文を検討しているところですが、少しずつこれまでの礼拝を見直し、刷新をしていくことも必要かと考えています。

このように御前にあることを意識する。これはすでに信仰の領域にある事柄です。言わば礼拝そのものが人間の理性を越え

た次元の出来事であります。こういうことを秘義と言います。信仰に関わる事柄はすべて秘義であると申し上げてもよいでしょう。Iコリント2:6-7を読みます。それは隠されている。あるスコットランドの牧師はそれをオープンシークレットと呼びました。「開かれた秘密」ちょっと矛盾する言葉ですが、信仰の事柄というのは、すべての人に開かれています。でもすべての人に分かるものではない。隠されている。それは人間の知恵で理解できることではありません。「神の霊以外に神のことを知る者はいません」(Iコリント2:11)とあるように聖霊の働きによって初めて分かることであります。

牧師が礼拝の中で「心を高くあげてください」と祈ることがあります。これは伝統的な祈りなのですが、日常に埋没した心を、高く上げなくてはならない。聖霊によってこの信仰の次元に高められる必要がある。そうでなければ人間は礼拝を心から喜ぶことはできません。本来、礼拝はかけがえのない時間であり、心揺さぶられる時です。御前に立ち、神さまとの生ける交わりを体験するのです。でもわたしたちはそういう感覚を失ってしまう。習慣化し形式化して、礼拝の感動が薄れてしまう。これはすべての事柄を人間の理性のもとに置こうとする近代以降の一つの傾向でもあります。

どうしてこのような話から説教を始めたかと申しますと、今日の信仰問答では、先週のところから引き続いて聖餐のことが取り上げられています。ともするとわたしたちはこのような流れの中で聖餐に与る感動を失いかけているのではないか。聖餐から信仰が抜け落ち、形だけ、形式的なものになっているのではないか。そういう秘義としての聖餐が失われつつある。だから先週もお話ししたような聖餐の混乱が教会の中に起こってくるのです。洗礼無しで聖餐はまさに信仰のないだけの食事に他なりません。もともと食事にもならない。小さなパンのかけらとコップにわずかなぶどうのジュースです。でもそれがかけがえのない食事になる。それは聖餐の中にある秘義に目を留めた瞬間です。今日は聖餐の秘義性について一緒に考えたい。そのパンと杯に隠されている奥義、あるいはそのパンと杯から見えてくる天国。そこに内包されている福音の出来事に集中していきたいと思うのです。この聖餐の秘義を受け入れることこそ、そこに聖餐に与る喜びを取り戻すことだと思えます。

問78を読みましょう。ここでは聖餐のしるしとしての性格をまず述べています。この問いはおそらく当時のローマカトリック教会とプロテスタント教会との聖餐を巡る論争を背景にしている問いであると考えられます。つまりローマカトリックでは聖餐のパンとブドウ酒が、司祭の聖別の祈りによってキリストの体と血になるという教理を持っています。これを「聖変化」と言い、これがいわゆる「化体説」と呼ばれるものですが、プロテスタント教会はそのように聖餐のパンと杯を理解していま

せん。ですから「いいえ」と答えます。この聖餐を巡る論争についてはまた来週の説教でも触れることになるでしょう。わたしたち改革派の教会では聖餐のパンと杯がキリストの体、血に変化するのではなく、あくまでもそれはパンであり杯でありますが、それはキリストの体を示すしるし、保証であるというのです。でも注意していただきたいのは、それは単なる象徴ではありません。つまりこれに与ることによって、この聖礼典が指し示しているところのキリストの体をはっきりと意識するのです。大切なのは、そのパンと杯が指し示しているものです。聖餐はそこにわたしたちの意識を導きます。

今日は、旧約聖書の出エジプト記第12章にある過越の食事のところを読みました。これはイスラエルの人たちが今日も大切に守っている特別な食事です。それはあのエジプトから救われた出エジプトの出来事を指し示し、思い起こすための食事です。だから普通の食事とは違う。小羊をほふり、その小羊の肉を酵母を入れないパンと苦菜を添えて食べる。しかも急いで。そしてこの小羊の血を家の門に塗るのです。すると当然子どもたちが尋ねる。どうしていつもの食事とは違うのか。いつもは普通のパンなのに、もっといろいろな野菜を食べるのに。今日はどうしてカリカリの固いパンに苦い菜っ葉だけなの。そこで親は答えるのです。その昔わたしたちはエジプトで奴隷だった。ところが神さまは強い力をもってそこからわたしたちを救い出してくださいました。小羊の血の塗られた家が目印となって、そこを主の災いが過越していった。これが主の過越の犠牲だ。この救いがあったからわたしたちはエジプトから脱出することができた。だからこれを食べて神さまの救いを思い起こそう。そしてお祝いしよう。それを食べる度に、親は子どもたちに繰り返しその意味を教え、これを語り継いで、共同体は命をつないできたのです。この食事は出エジプトの救いを指し示し思い起こすしるしであり、その救いの保証となりました。

わたしたちの聖餐の原点である最後の晩餐。主イエスがこの食事をした時もこの過越の食事の時でありました。そこで主は御自身をあつた過越の小羊になぞらえておられます。御自身の十字架の犠牲によって、わたしたちを神さまの裁きが過ぎ越す。主がわたしの代わりに裁かれることによって、わたしが神さまの裁きを逃れることができた。ここに神さまの救いがあります。わたしたちはあのパンと杯をいただく時に何よりそのことを覚えるのです。このわたしが救われるために、主はあの十字架で体を裂き、血を流された。その尊い犠牲のうえに、わたしたちは罪赦され、今、神さまの御前に立つことができるのだということ。このパンと杯の向こうにそのような神さまの救いが見えてこなければなりません。

そして見えるだけではない。このパンと杯を実際に口にして味わうことにより、この救いがわたしたちの中に封印されるのです。問79を読みます。「聖霊のお働きによって、そのまことの体と血とにあずかっている」とあります。この信仰がわたしたち改革派の聖餐理解です。そのパンと杯は、カトリックのようにキリストの体と血に変化するものではありません。でも信仰をもってそのパンと杯に与る時に、聖霊が働いて、わたしたちをキリストに与らせてくださる。カルヴァンは「降下した聖霊は信仰者を、天のキリストにまで引き上げ、その血肉に与らせる」と言います。そこでわたしたちはキリストといよいよ一つにされていることを確信するのです。問76を読みましょう。

しかも一つにされているということは、この方の苦難と従順をわたしのものとして生きることができる。それは非常に都合の良いことなのですが、それを赦されるのです。そういうことがあの聖餐の時に起こっている。これはまさに秘義なのです。奇跡なのです。そういう食卓に招かれています。このまことの食べ物こそわたしたちの信仰を強め、励まし、支えるのです。何が信仰を支えるか。自分の強い意志か、教会のお友だちか。そうではない。この主の食卓がわたしたちを支える。このまことの食べ物こそ教会の命になるのです。Iコリント10:16を読みましょう

プロテスタント教会は、説教中心であって、聖餐はあまり重んじられていないと考えるのは大きな間違いです。改革者たちは、口を揃えて聖餐の大切さを説きました。すぐにも秘義を見失うわたしたちの霊的な弱さを緩和するために聖餐は必要であります。わたくしは赴任以来この錦ヶ丘教会の礼拝堂がとても気に入っています。何よりこの聖餐卓が素晴らしい。どうぞ礼拝後に前に来てこの聖餐卓を見てください。毎週のお掃除の方はよく知っていると思いますが、これがものすごく重いのです。そしてこの聖餐卓から赤い絨毯が会衆席に向かって流れています。これはキリストの流された血潮を意味しています。その教会が何を中心にしているか。それは礼拝堂にもよく表れています。ここでわたしたちはキリストの命を分かち合い生きていくのです。罪の赦しと永遠の命を確信して、また新しく歩み出すのです。毎週の礼拝においてその秘義をどうぞ豊かに感じていただきたい。